

Title	トマス・ L・ ソーソン著 奈良和重訳 『バイオポリティックス』 : 生物・ 文化的進化の政治学
Sub Title	Thomas L. Thorson, Biopolitics
Author	曾根, 泰教(Sone, Yasunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.47, No.3 (1974. 3) ,p.145- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19740315-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を起こしつつ、統治機構を利益追求の具となした。ここに、行政制度の発展を望むのは無理であつた。更に、地方名望家達は、十三世紀の中央政府が法の權威の確立のためにたゆみなく發展させた法手統と法廷制度を、逆手にとつてそれを忠実に遂行して自己の利益獲得の手段としたのであつた。地方の行政と司法の遲滞は明白であり、制度發展の速度も減少した(五八頁―六四頁)。あるいは又、國王直轄地の運営においても内在的矛盾が顕在化した。初期の役人は即ち莊園管理人であり、彼等は本質的に従來の形式と制度を變革することを拒否した。社会状況が變化したにもかかわらず、それに対応することはできなかつた。彼等は、自らの慣習を守ることに忠実であり、統治制度の發展に必須な各分野の協力というものに無關心であつたので、制度は半ば自律団体と化し、自己追求の団体となつた(六九頁―七二頁)。この種の問題に対し改革はなされたにもかかわらず、官僚の意識を變革するまでには至らなかつた。フランスの場合、改革のために官僚制の規模を拡大させたが、これはいたずらに統治組織を複雑化しただけで、実効は上がらず、人民を擯取することで収入増加を計つた(七三頁)。この第二段階の最大の問題は、政策決定者と官僚の間の越え難い乖離であつた。王とその側近達で決定された政策は、思いつきのものであり、専門官僚の意見は反映されていかなかつたのである。国家制度の近代化という視点で究明した著者の営みは貴重なものである。本書はこの種の問題に対し、自己の見解を吟味しようとする者にとつて必読のものといえる。

驚見 誠一

トマス・L・ソーソン著
奈良和重訳

『バイオポリティクス』

——生物・文化的進化の政治学——

現代政治学に限らず、過去において政治学は実にさまざまな分野で發達した手法を取り入れてきた。そのためばかりとはいえないが、現在政治学を学ぶ者は少々の新奇性に対してはそれほどの驚きを示さない。サイバネティクスにしろ、システムズ・アナリシスにしろ、計量政治学 (Political Metrics) または Politometrics にしろすでにかなりなじみのある分析用具として定着した感がある。しかし、ここで紹介する『バイオポリティクス』が『生物政治学』として翻訳予定に示されたとき、何か所かでそれがいつたいどんな本であるかということが話題になつた記憶がある。少なからず『生物政治学』という魅力的なタイトルが現代政治学を研究している者の知的好奇心を刺激したのではなからうか。

『生物政治学』が原題通り『バイオポリティクス』であるにしても奇異なる印象を与えることに変わりはない。それが單なる社会有機体説のむし返しであつたり、スペンサー流の社会進化論の復活を願うものであるとしたり、それほど奇異でもなく、かつ魅力ある著作

とはいえないが、内容からいつてもかなりの程度本格的な体裁を整えたものであるということは、その理論体系をのぞいてみたいという誘惑をひき起こす。たとえばD・イーストンがシステムの概念で政治学を書きかえ、K・ドイッチが情報とサイバネティクスで政治体系の理論化を試みたようにソーンソンも「バイオポリティクス」なる新分野の創設を試みようとしている。それは単なる分野としての新奇性のみならず、各章の構成も相当程度ソフィストケートされたものであることは次の目次を見れば明らかであろう。

まえがき

序論 政治の映像

第一部 普遍Ⅱ一般化パラダイム…批判

第一章 視角状況の問題

第二章 人間の作為としての科学

第三章 現代政治学は誤まりにもとづいているか？

第四章 パラダイムと政治的理解

第五章 政治の一般科学

第二部 進化Ⅱ発展的パラダイム…ひとつの思索

第六章 時間次元の把握

第七章 現象としての人間

第八章 現象としての政治

第九章 《文化的DNA》をめざして——政治的進化と情報伝

達

第十章 自己を意識する進化

日本語版によせて——バイオポリティクスとは何か——
訳者あとがき

いうまでもなく「現象としての人間」はティヤール・ド・シャルダンからとられたものであるし、「パラダイム」はトーマス・クーンの概念であり、「DNA」とはもちろん今日の分子生物学の中心概念のことであることは明らかであろう。しかし、おそらく本書の特徴は単にタイトルと各章につけられたソフィストケートされた名前が興味をそそるということだけではないに、トゥールミンの引用にはじまり、カミュを論ずる最後の章に至るまで、およそ現代のあらゆる分野で話題になつている思想家（理論家）が登場していることであろう。

プラトン、アリストテレス、マルクス、イーストン、アーモンド、オズグッド、ニュートン、ダーウイン、ローレンツ、レヴィンストロース、マクルーハン、ヴェイトゲンシュタイン、さらにキルケゴール、ニーチェまで登場する。

そして、議論の対象となる範囲は科学哲学から動物行動学、進化論、実存主義、コミュニケーション論等に至るきわめて広い範囲を含む。およそこれだけのものを組上りにのせた政治理論となると全体的に評価することは非常にむずかしい。

ソーンソンはこの著書において(1)科学的理解の普遍Ⅱ一般化パラダイムを政治学が採用する結果とは何か？ (2)科学的理解の進化Ⅱ発展的パラダイムの採用は、政治学にとつてどんな結果をもたらすよ

うになるか？ という二つの問題を中心に議論を進め、「バイオポリティクス」を理論化することをめざし、いわゆる「行動論以後の革命」に一つの方向を示唆しようとしているのである。

それゆえここにおける批評も著書全体を章を追って詳細に紹介することは、登場人物の多さからいつても、論ずるテーマの大きさからいつてもおよそ短い紙面で論じざることは不可能であり、むしろ読者に実際にこの著書を手にとつていただく方がより近道であると思う。それゆえここではソーソンが提出した二つのテーマを中心に論じてみることにする。

最近の科学哲学の動きの中で注目すべきことは、オーソドックスな演繹的・法則的説明や「客観性」についての従来の理論に対する挑戦がハンソンやトゥールミン、スクライヴン、フェアベンドなどから提出されていることである。本書の著者ソーソンもハンソンの「センス・データ」の理論に対する批判から第一章の「視角状況の問題」を説きはじめ、第二章の「人間の作為としての科学」はステュブン・トゥールミンの従来の《科学》の定義に対する反省を論じ、それがまさに第一部の中心テーマとなつているのである。

すなわち社会科学者の間で一般的に容認されている「科学の目的とは正確に予測することである」という《科学》像をトゥールミンは批判し、「説明することと予測することとは、そのもつとも明瞭かつ鮮明な意味では、断じて同類のものではない」という。ソーソンはトゥールミンの《科学》概念を基礎に、次の二つに要約される

ことを明確に論ずる。すなわち「(1)すべての科学は、古典的力学によつて集約された普遍的一般化の目標に向つて進みつつあるという概念はまつたく誤りであり、一九六九年にはそのように理解されている。(2)科学の普遍的一般化概念はすでに長らく死の途上にあり——あるところではまだ死んだわけではないのですが——しかも、それがいちばん成功を収めていた領域、つまり物理学においてもつともゆつくりと死につつある」と。つまりニュートンのイメージが科学的説明についての予測——一般化という図式を生み出したのであり、この一九世紀的テーゼについて現象の理解および説明の理論に変化が生じ、《科学》について科学哲学者と科学史家の間に事実と解釈についての認識の差が生じたと見る。

おそらくそれはトーマス・クーンの言葉をもつてすれば「科学革命」が生ずることによる新たな《科学》論のパラダイムを提出すべきであり、また説明は《ある一般法則に従う》ということから《かくかくの方法で時間を通して発展する》という角度からの認識を基本とするべきであるのに、「社会科学者は相変らず教科書用の科学を語り、それが革命的であるかのように思ひなしています」とソーソンは指摘し、政治学者は大体「クーンが叙述しているような教科書用の科学という屍体にまさしく鞭打つていことがあらわになるでしょう」と現代政治学の《科学》概念を批判し、肝心なことは説明のテクニクや言葉ではなくパラダイムの選択にあるとする。

また科学の予測——一般化モデルは二つの代償を払つているとソーソンは指摘している。その一つは《三次元的代償で、たとえば斜面

をころがる球体についての一般化は、球体を「完全」な球面として考えているし、化学物質についての考察は「純粹」なものを想定しているというように。

もう一つの代償は《第四次元》のもので、時間についてであるという。すなわち、ニュートンの自然法則は時間・空間にかかわらず適用可能なものだからである。

「政治の一般科学」を論ずる場合もこのような代償を払って成り立つということになる。たとえばイーストンの政治体系論にしても、いかなる時間・空間の政治を扱おうとも斉一性を基礎に理論化がなされるわけであるから、かくかくの時に、かくかくの理由でかくかくの政治的事件が起きたということを書述するものではない。

さらにソーソンはイーストンの理論の中心的概念である「存統」^{レガチム}について鋭い批判を向ける。つまり、イーストンの行動体系として規定された「政治体系」は存統可能であるように入力を出力に転化し、フィードバックを行なうという方法で諸価値の権威的配分をすることを考えられるが、イーストンの理論はその普遍、一般性から「政治体系は、もはやどんな政治も存在しなくなるとき存統できなくなる」。あるいは「政治が存統できなくなるとき、政治体系は存統できなくなる」という結論にならざるをえない。そして、その一般的规定によりルイ一六世の時代にも、第一共和制の時代にもフランスには「諸価値の権威的配分」があつたのであるから、フランスの政治体系の「生命過程そのもの」は存統していったということになる。ここにおいてソーソンはイーストン理論の欠陥として、政治的

変化が何故生じたかについての説明を与えることができないことと、同時に「変動」に対する理解の不足を指摘し、「イーストンは一般理論を不手に構築する仕事をしたただけだ」と示唆してもよいかも知れません。」とまで言いきり、一九世紀的科学概念と抽象化にもなう代償の大きさを示す。

ソーソンが指摘するように予測＝一般化パラダイムは欠陥を持つ説明原理であるといえるが、社会科学者の間で一般に流通している「説明」のイメージは予測＝一般化パラダイムではない。たとえ行動論政治学者が《科学》を語るときには予測＝一般化モデルに依っているにしてもである。科学哲学が社会科学に与える影響はソーソンが指摘するほど大きなものとは思えないのである。

また、イーストンの「政治体系」に限らず機能主義に何らかのかたちで依存している理論は「存統」の問題についてソーソンの指摘のように問題となる。つまり、「存統」概念の問題点はイーストンのようなグラッド・セオリーにのみ生ずるだけではないということを考えれば、「存統」の問題は予測＝一般化理論のもつ固有の欠陥であるとはいいがたい。

さらに、一般化理論においても、その理論が一般化レベルに抽象化される際に切り捨てた部分への理解もしくは、一般化理論の説明力の問題としてその理論の適用範囲と情報内容についての考察は一般化理論が決して見捨ててきたといえないということもつけ加えておこう。

「一九世紀物理学のモデルに即して政治を理解する」ということ

は、それは科学的ではなくて、科学的に素朴なことです。」と述べる
ソーソンが注目する「時間」はたしかにニュートンの世界では問題
とならなかつたし、哲学的にもきわめてむずかしい問題であるが、
「時間」への注目はそのまま進化論へ結びつくものではなからう。

ソーソンも、「人間事象に進化論的視角状況を設定する議論を行
なうと、当然のことながら、たてつづけに敵意ある批判をさし招く
ことでしよう。」と当然の批判を予想し、たとえばカール・ポパーの
歴史主義批判にも言及しているし、本書が「適者生存」を社会へ適
用して「社会進化論の二〇世紀的復活を記述するなど決めてかか
つてはならない」とも主張している。

では、ここで述べられている時間への注目と進化論とはどんな意
味があるのかということが問題となる。それは人間が自己の特殊な
近代的特徴を發展させてきた方法を認識するという「歴史的知識」
と發展的理解への重視であり、それはまたティヤール・ド・シャル
ダンの『現象としての人間』の認識とも結びつく。ティヤールの主
張をひと口でいうにはむずかしいが「生物学的空間」時間」の中
での人間活動を広範な文脈、それは宇宙全体にまでの広がりの中で捉
えるのである。またソーソンはC・H・ワディントンの「人間とは
何ぞ、生物学的実体である」という命題の上につて議論を進め
る。

すなわち、ここに社会「文化的進化と生物学的進化の関連につい
て検討を試み、人間社会の文化システムを「社会」遺伝的」システ
ム、情報伝達システムとして捉える。そして、政治をこの文脈の上

で論ずべきであり、「人間は本性上政治的動物である」というアリ
ストテレスの命題の検討を「現象としての政治」の中で論ずる。

人間の政治性は自然の秩序の中で、他の動物が集団をなし、一定
の領土を占領し、防衛し、集団内に支配の階層を作るという意味で
『政治的』であると同様に、本性的に『政治的』であり、また、創
造の意味において、人間文化を創造する動物として本性的に『政治
的』であるわけであり、政治研究からいえば、前者が政治の発見に
なり、後者は政治の発明になるわけである。

そしてこの創造的な領域すなわち、文化的進化とは情報伝達の問
題であり、「学習」の分野でもある。ここでの情報伝達の大きさ、
たとえば「印刷」やマス・メディアの与えた影響はマクルーハンの
指摘をまつまでもなく、大きなものであつたことは想像にかたくな
い。ソーソンの基本認識はテクノロジーの発達を文化の所産と見、
文化的進化の中心をなすものとする。そこで、『文化的DNA』を
めざして「政治的進化と情報伝達」の章の中では人間のコミュニケ
ーションの手段の発達を文化史を書く。たとえば「印刷は個人主義
と個別化を促進する。」というように、それは距離をおいた客観性
を發達させるという認識に立つている。

さらに、ヴィトゲンシュタインが登場し、キルケゴールの引用へ
と続くが、両者を経験の論理を見たものとして「生の論理」へと導
き、さらにカミュへと言及が続き、彼は『デモクラシーの論理』の
正当化と科学的方法の正当化とをパラレルなものとしてとらえる。
というように実に議論の対象領域が広い。

ここで、カミュについての理解は訳者である奈良教授にまかせるとして、ヴィトゲンシュタインをキルケゴールとならべ、カミュへ結びつける理論化は、たとえヴィトゲンシュタインの生涯が「生の論理」と呼ぶにふさわしいものとしても、彼の哲学の理解として正しいかどうかは疑問が残る。

「政治的動物」としての人間を生物学的存在として位置づけることは、私自身、日本ザルの研究を参考にしてきたし、人間活動の中心を文化システムにおき情報伝達を解明することも、かつて《シンボリズム》の観点から分析したことがあるので、ソーソンの主張することにほとんど異論はない。たとえば、生物圏の進化を時間的に向向性をもつた必然的に不可逆的な過程と捉えたとすれば、時間の意味も理解できる。しかし、彼の言う「進化」概念がいささか不明な点と、生物圏における合目的性を社会の発展のレヴェルに想定しうるかということ、さらには彼の生物世界の「進化」の認識そのものに誤解があるように思える。たとえば、生物学的の把握は物理学的理解と背反するというようにとれる彼の理解にはやはり異をとなえざるをえない。政治学上の論争に、物理学や生物学的理解の正しさを競うのはあまり賢明なこととはいえないが、少なくとも現代の分子生物学は物理学的理解を基礎にしているし、遺伝子に関する「現代生物学の記述は純然と機械論的」(ジャク・モノー)である。さらにつけ加えれば、本書でとりあげられているシャルダンも、モノーによれば「自然との物活説的な旧約を結び直そうとか、なんらかの普遍的理解——それによれば人間にいたる生物圏の進化は、断絶なく連続し

ている宇宙的進化自体の一部であるという理論——の力を借りて、新しい盟約を結ぼうという考えは、もちろんティヤールがはじめて発見したものではない。じつは、それは十九世紀の科学的進歩主義の中心観念なのである。それは、スペンサーの実証主義や、マルクスおよびエンゲルスの弁証法的唯物論の核心にも見いだされるものである。」と。また「一九世紀の科学思想」の登場であるが、少なくとも、進化を社会的レヴェルにおいて時間的に向向性をもつた必然的に不可逆な過程であると捉え、何らかの社会の合目的性を想定することに問題があるのは確かであろうし、進化は弁証法的であるとはいいたい。

ここに紹介したソーソンのバイオポリティクスはやや冗長な引用につきあわされるにしても、たしかに新しい視角状況からの「政治」へのアプローチであるが、進化論自体は最近の社会科学においてスペンサー流のものではないにしろいくつか発表されている。たとえば、T・P・ソーソンの『社会類型——進化と比較』であるとか、ベラーの「宗教の進化」という論文とかがある。その意味においてはまったく新しい問題の提起とはいいたいし、著者の進化論の把握もすでに示したように問題はあつた。しかし、生物学の立場からの政治へのアプローチは多くの示唆を含んでいることは確かである。たとえば「ゲームの理論」のA・ラバポート、あるいは「一般体系論」のフォン・ベルタランフィ、また動物行動学のローレンツの『攻撃』などは政治学者の中に注目する人間がかなりあらわれて

いるし、ワトソンとクリックの『二重らせん』などは、単に現代のDNAを中心にした分子生物学の参考書という意味だけではなく、社会科学を学ぶ者にとつてもストーリーとして大変興味深いものがある。また、わが国でも、今西錦司の生物、進化に関する一連の研究や、日本ザルの研究、あるいは桑原万寿太郎などの動物のコミュニケーションの研究はそれ自体としてもおもしろいし、政治学的にも意味がある。

本書はこのような部分的に存在してきた各種の生物学説や哲学論を「バイオポリテイクス」の名の下に総合しようと試みたところに特徴があるが、『社会的DNA』などの興味ある分析も、一つの問題提起としてはおもしろいが、その構造の解明と「分子の配列」に相当する部分の理論化のレベルは分子生物学のそれに比すべくもない。

このような壮大な構造をもち、各分野の学者からの引用の頻繁な著書は実のところ大変紹介しにくいし、欠点が目につきやすいものである。が同時に、本書を流暢な日本語に訳された奈良教授の苦勞も書評に比べ何倍か大変であつたということも想像するに難くない。読後の率直な印象である。

(勁草書房 一九七三年 三八四頁 一八〇〇円)

曾根 泰教